この手引は、イエスがエルサレムへの最後の旅に発ち、そこで十字架の苦しみを受け、その後、復活の栄光をお受けになられるまでを、ルカの福音書に従ってたどるため書かれました。

レントの旅は、父のみこころに従いエルサレムに向かうイエスに従い、イエスの死と復活にあずかる旅です。私たちもイエスの十字架への道を共に歩みましょう。そして、私たちがイエスと共に歩むうちに、イエスが私たちの人生を共に歩んでくださることを日々の生活の中に見出しましょう。

黙想で教えられたことを『日々の聖句』のウェブ・ページ（https://penguinclub.net/mokusou）に書き込んでください。互いのコメントを分かち合い、黙想をより豊かなものとしてください。

執筆者は、次の通りです。各ページの末尾に執筆者のイニシャルが記されています。

細見剛正（TH）ストージ長老教会協力牧師
大川道雄（OM）北米ホーリネス教団名誉牧師
大久保満（MO）アンカーサウスベイ教会牧師
中島由美子（YN）ウェストロサンゼルス・ホーリネス教会牧師夫人
高岡宏光（HT）オーランド日本語バプテスト教会牧師
鶴田健次（KT）ラスベガス日本人教会牧師
横井滋幸（SY）コロラド日本語教会牧師
中尾フィリップ（PN）ダラス永楽長老教会日本語ミニストリー協力牧師
中尾照代（TN）同夫人

なお、聖句は新改訳２０１７より引用しています。引用の後の括弧内の数字はその箇所の節を表します。

しかし、わたしは今日も明日も、その次の日も進んで行かなければならない。預言者がエルサレム以外のところで死ぬことはあり得ないのだ。（33）

エルサレムへの旅の途上にあったイエスに、何人かのパリサイ人たちが「ヘロデがあなたを殺そうとしています」と告げました。私たちだったら、誰かが自分を殺そうとしている、と聞いただけで震え上がります。ましてや、自分を殺そうとしているのが時の権力者であるならば、もうそれだけで死刑宣告を受けたような絶望に陥ることでしょう。ところがイエスは、「ヘロデがあなたを殺そうとしています」と告げたこのパリサイ人たちに、冒頭の御言葉のようにお答えになりました。そもそも十字架で死ぬことをご自身の生涯の目的にしておられたイエスには、ヘロデの名をかたったパリサイ人たちの脅しであっても、ものの数には入らなかったのでしょう。

同じ強さを身につけるよう、イエスは私たちを招いてくださっています。「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」（ルカ14・26、27）何か握りしめて離すことができないものが私たちにある時、その周辺には、それを失うことに対する恐れや不安が発生します。私たちのうちに生じる恐れや不安の大半は、この種のものではないでしょうか。自分に死ぬこと、それが強さの秘訣であることを、イエスはご自身の生き方を通して教えてくださっているように思います。

祈り　主よ。あなたの招きに応じる素直さとゆだねる心を私にお与えください。

HT

この他国人のほかに、神をあがめるために戻ってきた者はいなかったのか。（18）

今日では完治しますが、昔は不治の病として恐れられていたのが、ヘブル語でツアラアトと呼ばれる病気です。昔イスラエルでもこの病気の人々は社会から隔離されて、大変辛い生活を送っていました。ですから、どんな病気をも癒やされるイエスという方が、近くに来られたと聞いたこの病気の人たち十人は、イエスさまを見つけて声を限りに癒やしを求めました。あわれみ深いイエスさまは、この十人をみな癒やしてあげました。癒やされた人々は、どんなに喜んだことでしょう。

けれども、イエスの許に来て感謝を捧げたのは、そのうちの一人だけでした。他の九人は、癒しはいただいたけれども、癒やし主なるイエスを崇めることもせず、感謝もしないまま自分の道を行ってしまいました。

病気の癒やしは大事ですが、癒やし主なる神との関係は、もっと重要な事です。人と人との間でも、厚意を受けたら感謝するのはあたりまえですが、神に対してはなおさらです。受ける資格のない者が、神さまからいただいた恵みの数々に、ひれ伏して感謝するのは当然の事です。恵みを数えて一つ一つ感謝の言葉を神さまに申し上げると、私たちの心も温かくなり喜びと力が沸いてきます。

心から感謝する事で、神さまとの愛の関係が与えられ、神さまと深い交わりができるようになります。それは目に見える恵み以上に尊いものです。

祈り　あわれみ深い癒やし主よ。私の心にあなたへの感謝を常に満たしてください。　TN

律法学者たちと祭司長たちは、このたとえ話が自分たちを指して語られたことに気づいた。（19）

この譬の「農夫」は祭司長などのユダヤの「指導者」のことです。主人が農夫たちに「収穫」を求めたのは、神が神の民に「信仰」を求められたことを意味します。主人が遣わした「しもべ」は「預言者」のことです。神は神から離れた神の民を悔い改めに導くため預言者たちを遣わしてくださったのです。神が遣わした預言者は、実際は「三人」どころでなく数多くいましたが、ここで「三」という数は、日本語で「再三」というのと同じ意味で使われ、神の忍耐が強調されています。

主人は「しもべ」に代えて自分の「愛する息子」を送りました。「どうしようか。そうだ、私の愛する息子を送ろう」という主人の自問自答は、ご自分に逆らう神の民のために途方にくれるほどに心を配ってくださった神の御心をよく表わしています。神は熟慮の末、「愛する息子」であるイエスを送ってくださったのです。ところが、農夫は彼を「ぶどう園の外」に放り出して殺してしまいました。これはイエスを異邦人である総督に引き渡すつもりでいた彼らの計略を指しています。彼らはこんなに明確に悪を指摘されても悔い改めませんでした。ヨハネが「この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった」（ヨハネ1・11）と書いた通りです。現代の神の民も同じ罪を犯さないようにと祈るのみです。

祈り　あなたの恵みなしには、私たちも同じ反逆の道を歩んでしまいます。主よ。あわれんでください。

PN

イエスは何もお答えにならなかった。（9）

イエスの身柄はユダヤの最高法院からローマ総督ピラトのもとに送られ、さらにガリラヤの領主ヘロデへと「たらい回し」にされました。領主ヘロデはヘロデ大王の息子で、自分の兄弟の妻を横取りし、その不義をバプテスマのヨハネから指摘されると、ヨハネを投獄し、最後には妻の言葉に従ってヨハネの首をはねた人物です。イエスは彼のことを「狐」（ルカ 13・32）と呼んでいます。その人格の低さ、生活の乱れ、そして性格の狡猾さを指して、そう言ったのでしょう。

領主ヘロデの人格や性格は、ここでのイエスに対する態度からよく分かります。ヘロデはイエスを見ると、非常に喜びました。イエスが奇蹟を行うのを見たいと思っていたからです。ヘロデはイエスに「さあ、何か不思議なことをやってみろ」と要求し、イエスを道化師のように扱ったのです。そして、イエスが何も答えないと、イエスを口汚くののしったり、からかったりし、ピラトのもとへと送り返しました。ピラトは、イエスに罪のないことを認め、なんとかイエスを赦そうと努力していますが、ヘロデに至っては、そうした人間らしささえありません。

イエスに対してどう接するか。そこにその人の人格が表れます。イエスに対して誠実で真実な人は、人に対しても誠実で真実です。もちろん、人間の誠実さや真実さは完全ではなく限界がありますが、精一杯の誠実と真実をもってイエスに接する者は、その誠実さと真実を、イエスの力によって増していただけるのです。

祈り　主よ。私を誠実と真実をもってあなたに近づく者としてください。

PN

あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。（5〜6）

主イエスが、十字架につけられ三日がたちました。週のはじめの日になって、主と親しかった婦人たちが、墓に参りました。男の弟子たちは、墓に行こうともしませんでした。主の死に大きなショックを受けていたからです。彼女たちは、死体に塗るための香料をを用意していました。死体を見ることだけを期待していました。ところが主のお体は見当たりませんでした。墓は空でした。主はよみがえられたのです。二人の天使から、「どうして生きている方を死人の中に捜すのですか」と言われて、彼女たちは、墓参りはむなしいことだったことに気がついたのです。

弟子たちは主は死んでいるのだと思っていました。人は誰でも死ぬのだから…と。しかし、人は墓で終わるのなら、本当の望みはないのです。キリストは、何度もよみがえりを予告されたのに、彼らの耳には入りませんでした。生きるとは死に勝つことです。死に勝たなければ、本当に生きることにはならないのです。キリストのよみがえりは、死に勝つことのサンプル（見本）です。人は生きているのではなく、生かされているのです。信仰とは、このことをはっきりさせることです。人の生き方は、神に対してどういう態度で生きているかにかかっています。信仰とは、愛とは、いきいきと生きることなのです。主は〈生かす〉お方です。

祈り　復活の信仰を感謝します。それによってさらに復活の偉大さを知る者としてください。　OM

試し読みはここまでです。

お気に入りましたら、

注文してください。

Penguin Club
https://penguinclub.net